きみはポパイになれるか

長崎源之助 作　山中冬児 絵

子どもの文学

きみはポパイになれるか

NDC 913　　偕成社　158p　23cm

発　行　1984年12月　初版第1刷

作　者　長崎源之助（ながさきげんのすけ）

発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社

〒162　東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
電話　(03)260-3221(営業部)　3229(編集部)
振替　東京5－1352番

印　刷　新興印刷製本株式会社
製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-03-626840-6　　Printed in Japan

© Gennosuke NAGASAKI, Fuyuji YAMANAKA 1984

きみはポパイになれるか

長崎源之助 作　山中冬児 絵

●はじめに

敵が強いとき、

ポパイのホウレン草みたいなものが、あったらいいな、とおもうだろう。

でも、そんなホウレン草なんか、あるはずがない。

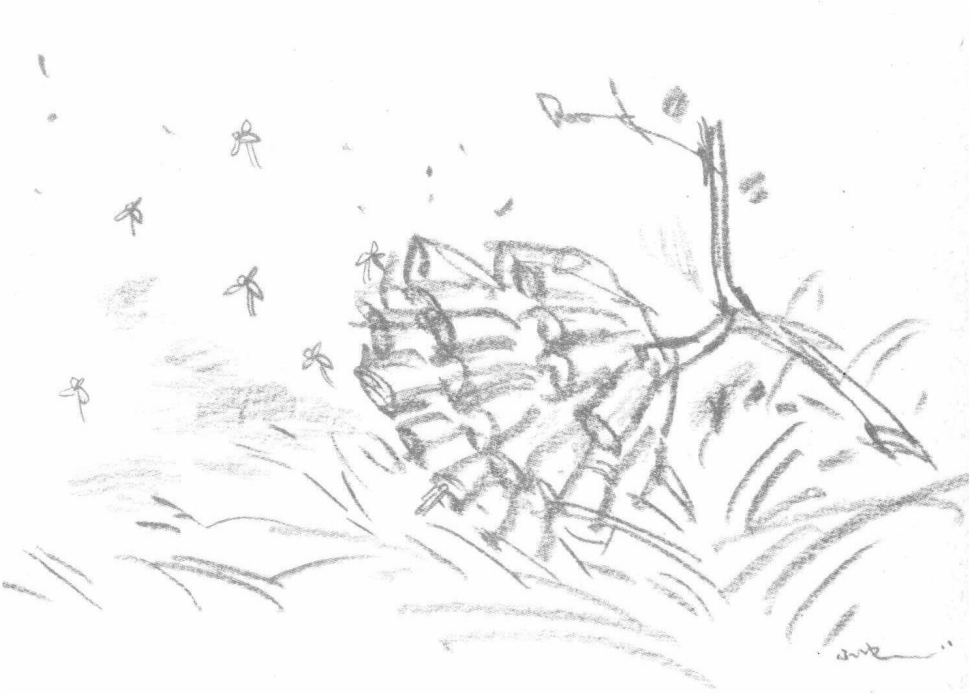
オリーブ、あやうし！

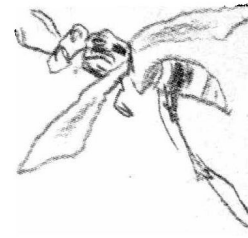
さあ、きみなら、どうする？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きみはポパイになれるか／もくじ

第1章
ぶたまんとオリーブ……8
第2章
へんなポパイ……56
第3章
ぼくは、ぼくなんだから……105
あとがき　158





作者・**長崎 源之助**（ながさき げんのすけ）
1924年，横浜に生まれる。日本児童文学者協会員。よこはま文庫の会会長。著書に『ヒョコタンの山羊』『トンネル山の子どもたち』（ともに日本児童文学者協会賞）『忘れられた島へ』（野間児童文芸賞）『向こう横町のおいなりさん』『私のよこはま物語』『どろんこさぶ』『東京からきた女の子』『本のある遊び場』など多数ある。住所／横浜市南区井土ケ谷中町152

画家・**山中 冬児**（やまなか ふゆじ）
1922年，大阪に生まれる。大阪中之島洋画研究所卒業。日本美術家連盟，童美連会員。作品に『東京からきた女の子』『長いながい道』『五年二組の宿題戦争』『五年二組の秘密クラブ』『五年二組の探偵団』絵本『ぎおんまつり』など多数。住所／東京都世田谷区宮坂1—11—2

きみはボハイになれるか

長崎源之助

第1章　ぶたまんとオリーブ

1

「父さん、結婚しようとおもうんだ。」

父さんったら、コーヒーをのみながら、きゅうにそんなことをいうんだもの。ミサコは、トーストがのどにつかえて、目をしろくろさせてしまいました。

「でも、父さんがその人をすきでも、ミサコがすきになれるかどうかわからないし、それに、その人には、ミサコとおなじ五年生の男の子がいるんだ。その子――タケシっていうんだがね、そのタケシくんを、ミサコが気にいるかどうかもわからないし……」

父さんはそういって、ひと口コーヒーをの

みました。

「だから、ためしに、しばらくいっしょにすんでみて、その結果、うまくくらせそうだったら、正式に結婚しようとおもうんだが、どうだろう?」

父さんって、ほんとうにかわっています。こんな重要なことを、

「ためしに、しばらくだなんて。」

ミサコが、そういうと、父さんったら、

「重要だから、しんちょうに、まずためしに、なんじゃないか。」

ですって。

そういわれてみれば、そうだわねえとおもったんですが、なんだか、やっぱりへんです。

父さんのいうことは、たしかにまちがっていません。でも、どこか、ふつうの人とはちょっとかわっていて、ふざけているみたいにおもわれます。

そこんとこが、母さんには理解できなかったのです。だから、

「わたし、とてもあなたにはついていけないわ。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

と、でていってしまったのです。
「ミサコも、いっしょにいく？」
って、母さんにきかれたけれど、ミサコは、なんだか父さんがとてもさびしそうで、かわいそうだったもんだから、のこることにしたんです。
だって、そのころの父さんは、室内装飾の事業にしっぱいした直後だったんです。はじめは、母さんも、
「元気だしなさいよ、もういちどがんばりましょうよ。」
と、いっしょうけんめいはげましました。
父さんもその気になって、資金あつめにかけずりまわっていました。だが、お金はおもうようにあつまりませんでした。
「ぼく、絵かきになることにきめたよ。」
ある朝、とつぜん、父さんはいいだしたんです。
「ぼくには、商売の才能はないんだ。それなのに、一生、金のためにあくせくするのは、いやになった。」

「じゃあ、あなたは絵かきの才能があるっていうの。絵をかいて、妻子をやしなう自信があるっていうんですか？」

父さんは、趣味で油絵をかいていました。大きな展覧会の会員でもあるし、一部の人たちには、かなり評価されていました。

だが、抽象画というのだそうですが、一見、いろいろの絵の具をあつくぬりかさねただけで、なにをかいたのかわからないような、父さんの作品が売れるとはかんがえられませんでした。

「あなたって、いつもそうなんだから、じぶんのことしかかんがえてないんだから。おつとめをやめるときだって、そうだったわ。人につかわれるのはいやになったって、わたしになんの相談もなく、さっさとやめてしまったんですからね。」

母さんは、大きなためいきをつきました。

「あなたは、すきかってなことをすればいいわ。でも、わたしはいやよ。不安でついていけないわ。いまのうちにわかれたほうが、おたがいのためにしあわせだとおもうの。」

父さんは、母さんのでていくのを、とめませんでした。ふりかえりもしないで、ただ、だまって絵をかいていました。

「ミサコ、いやになったら、いつでも電話かけるのよ。母さん、むかえにきてやるからね。」

母さんは、そういったけれど、ミサコはまだ電話をかけたことがありません。でも、母さんのほうから、ときたま電話がかかってきます。

「どう、元気？　ごはん、ちゃんとたべてる？　カップラーメンばかりじゃだめよ。いい、わかったわね。」

母さんは、病院の保健事務をやっているのだそうです。けっこうたのしくやってるそうです。電話の声もはればれとしていて、わかくきこえました。

「ミサコ、しあわせ？」

ときかれて、ミサコは、しあわせなのかどうか、じぶんでもわかりませんでした。ただ、父さんと母さんが、いいあらそう声をきかなくてすむのは、ありがたいとおもっています。

「じゃあ、いいんだね、ミサコ。ためしにくらす話。」
父さんが、返事をうながしました。
「うん。」
「よし、それできまった。あしたからくるようにいおう。」
「えっ、あしたから？」
ミサコは、あきれました。
「ほんとにもう。父さんったら、せっかちなんだから。あたしにだって、心のじゅんびってもんがあるわよ。」
「へえ、心のじゅんびだなんて、おまえ、ずいぶんしゃれたことば知ってるんだな。その心のじゅんびのために、ためしにくらすんじゃないか。それじゃあ、じゅんびのためのじゅんびになっちゃうじゃないか。」
ミサコがふくれているのをみると、父さんは、いくらかやさしい声でいいました。
「まあ、とにかくいっしょにくらしてみておくれよ。その人たちには、二階にすんでもらって、父さんとミサコは、下でねよう。」

そんなわけで、ミサコは、気がすすまないままに、タケシ親子といっしょにすむはめになったのです。

2

「あなたがミサコさんね。まあ、ほんとうにかっぱつそうなおじょうさんですこと。」

あの人――サユリさんは、ミサコをみると、そういいました。

（父さんったら、きっと、あたしのこと、おてんばむすめだって、いったんだわ。）

と、ミサコはおもいました。

（よーし、おてんばでびっくりさせてやるから。）

サユリさんは、ほっそりとした、色白の人で、知的な顔をしていました。それにひきかえ、タケシときたら、ふとっていて、のっそりした感じです。おまけに、度のつよいめがねをかけているのです。ミサコは、がっかりしてしまいました。どうせいっしょにくらすなら、もっとハンサムな子のほうがよかったのに。

ミサコはやせっぽちです。だから、オリーブというあだ名がついています。オリー

ブって、ほら、あのポパイのガールフレンドのことです。こうみえても、ミサコは男子たちに、ちょっと人気があるんです。

「さあ、きょうは、同居記念に、お庭でバーベキューをしましょう。ミサコさん、手つだってちょうだいね。」

サユリさんは、やさしい声でいいました。

「はーい。」

ミサコは、きどってこたえたまではよかったのですが、食器だなから皿をおろそうとしたとたんに、手がすべって、ガチャガチャガチャン！　いっぺんに、三枚も皿をわってしまいました。

それぱかりではありません。大皿にもった肉をはこぶとちゅう、しきいにつまずいてころんでしまったのです。だから、肉は地面にちらかってしまいました。

タケシは、みかけによらずよく気がつきます。手ばやいというわけではありませんが、けっこう手ぎわよくなんでもやりました。テーブルに皿をならべたり、その皿にセロリやアスパラガスをもりつけたり、コーラをコップについだり、まるでボーイさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com